



【本プログラム創設者、日本代表】

Kobayashi Noboru ●医学博士。東京大学名誉教授。国立小児病院名誉院長。1927年東京生まれ。1954年東京大学医学部卒業。国際小児科学会会長、国立小児病院医療センター初代センター長、国立小児病院院長などを歴任。現在は、チャイルド・リサーチ・ネット (<http://www.crn.or.jp>) 所長、ベネッセ次世代育成研究所所長、子どもの虹情報研修センター・センター長、日本子ども学会代表などを務める。

皆で一緒に子どものことを考えよう

小林 登（東アジア子ども学交流プログラム代表、CRN所長）

ここに、長沙・東京・杭州で開かれた「東アジア子ども学交流プログラム」の3回のシンポジウムがまとめられることは、誠に喜ばしい。

「東アジア子ども学交流プログラム」^① East Asia Child Science Exchange Program^② は、現在、中国と我が国とで共同して行っているプロジェクトであるが、開始以来2年目でさまざまな成果を上げている。その理由としては、子どもに関心をもついろいろな立場の学者・研究者が学際的に交流していること、我々の言う「子ども学」が「児童科学」として中国側に受け入れられたことが挙げられる。21世紀の科学のトレンドは学際的なものになると言われている。

が、我々は「子ども学」によって、少なくとも子どもの領域では問題解決の先端を走っていると言えよう。

「子どもの問題」^③ children's issues^④ の解決には、限られた専門分野だけでは十分でないことは明らかで、いろいろな立場の学問を考え合わせる必要がある。そして、国境を越えての話し合いは、それぞれ異なった文化の背景の中で考えることになるので、学際性を超えた異文化比較により、さらに貴重な洞察を得ることになる。今後は、これまでの3回の貴重な経験を生かし、中国の各地でさらに活動を展開しなければ、ならないだろう。中国の広大な国土を考えれば、

東アジア子ども学交流プログラムの概要

- 開催趣旨：育児・保育・教育に関係する東アジアの大学、教授の相互交換講義を支援し、子ども学の普及と国際化を目指す。その結果、子どもを取り巻く諸問題の解決や環境改善に役立つような学術活動を推進する。
- 主催：チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)、華東師範大学
- 共催：楨ベネッセコーポレーション、ベネッセ次世代育成研究所
- 後援：中華人民共和国駐日本国大使館、日本子ども学会、日本赤ちゃん学会、異文化比較学会、日中教育交流会議など
- 事務局：チャイルド・リサーチ・ネット (<http://www.crn.or.jp>)

本プログラムは、2007年11月に上海華東師範大学で開幕し、長沙、2008年に東京、杭州と3回の活動を行いました。

子ども学を広める活動はますます必要となるはずである。また、中国以外の国、特に韓国の学者・研究者も仲間に入っただけで、名実ともに「東アジア」の研究プロジェクトへと発展させたいものである。

子どもは、今も昔も、いかなる文化の中にあっても、大切に育てなければならぬ存在である。世界の平和は、子どもの支援から始めるべきことは明らかである。未来に向け平和な国際社会をつくるためにも、このささやかな「東アジア子ども学交流プログラム」の発展に、我々は努力したい。

【中国代表】

Zhu Jinxiong ● 華東師範大学教授。学前教育研究所所長。中国学前教育研究会副理事长。上海市幼儿教育研究会副会长兼秘書長。中国教育部の国家プロジェクトである「学前教育学科養成目標・基準とカリキュラムの研究および実践」、「幼児教育改革実験研究」などを担当する。



子ども学の主張に心より賛同いたします

朱 家雄（華東師範大学教授 東アジア子ども学交流プログラム中国代表）

東アジア子ども学交流プログラムは2007年11月12日に中国の華東師範大学で開幕式を行って以来、中国の長沙、杭州および日本の東京においてすでに3回の活動を成功させております。

東アジア子ども学交流プログラムは、東京大学名誉教授であり、日本国立小児病院名誉院長、C R N所長でもある著名な小児科医の小林登先生の主導で創設され、中華人民共和国駐日本国大使館、日本子ども学会、日本赤ちゃん学会、異文化比較学会、日中教育交流会議等の協賛を受け、(株)ベネッセコーポレーションの支援によって運営されております。

その主旨は、育児、保育、幼児教育等に関する仕事と研究に従事している東アジア各国の大学と大学教授の相互訪問や交換講義を通じて「子ども学」の普及とグローバル化を実現し、子どもに関する各種の問題を解決し、子どもの生活環境を改善して、すばらしい未来を創るた

めに貢献することにあります。私はこのプログラムの中国側責任者を拝命しましたことを誠に光栄に存じております。

私は、小林登先生が提唱していらっしゃる「子ども学」の主張に心より賛同いたします。小林登先生との数多い交流および、3回の東アジア子ども学交流プログラム活動を含む、さまざまな学術活動へ参加する中で、医学、小児科学、脳科学、心理学、教育学、社会学、人類学、法律学、工学、建築学等の自然科学・社会科学・人文科学が有機的に結びついてはじめて、子どもが直面する各種の問題を総合的に探求し、解決できるものであると、深く会得致しました。

東アジア子ども学交流プログラムの活動を組織し、それに参加する過程において、中日両国の、子どもに関するさまざまな学術分野の専門家が一堂に会し、互いに切磋琢磨し、相互に協議するという光景を目にいたしました。両国

り新しい思考をほとばしらせ、新たな戦略と方策を生み出すことができるということを、私は肌で感じ、感銘を受けたのです。

東アジア子ども学交流プログラムのこれまでの3回の活動では、「子ども学の意味」「異文化の比較研究」および「子どもにやさしい「チャイルドケアリング・デザイン」を」等のテーマが議題となりました。中日両国の子ども研究に関する理論と実践に携わる者による熱い討論は、学術的発展を促進したばかりでなく、中日両国人民の交流と友情を増進させました。

私は、東アジア子ども学交流プログラムがこれまでの経験を総括した上に、さらに大きい収穫を得ることができるよう切に望んでおります。我々が力を合わせて協力し、これまでと変わることなく、絶え間なく努力すれば、我々はきっと今よりもいっそうの成功を収めることができる、確信しております。

安梅勅江

Anme Tojike



保健学博士。筑波大学大学院人間総合科学研究科教授。スウェーデン・ヨンショピング大学客員教授。

1984年東京大学医学部保健学科卒、1989年東京大学医学系研究科大学院博士課程修了。専門は、生涯発達ケア、地域ケア、国際保健福祉マネジメント。国際保健福祉学会理事、日本保健福祉学会理事、ワシントン大学子どもアセスメントインストラクター。

一見真理子

Ichimi Mariko



国立教育政策研究所国際研究・協力部総括研究官。大学・大学院では、中国語・比較教育学・教育史を学ぶ。中国における子育て、子ども観、幼児教育・児童研究に関心をも

ち、1年半の北京留学。帰国後、国立教育研究所を拠点として日中教育関係史、アジア地域の教育政策と教育改革、アジアにおける子育て支援と早期教育などの調査研究に参加。

一色伸夫

Isshiki Nobuo



甲南女子大学人間科学部総合子ども学専攻教授。国際子ども学研究センター所長。NHK放送文化研究所客員研究員。NHK

では、NHK特集「赤ちゃん」など、子ども関連番組を数多く担当。現在、甲南女子大学では、子どもとメディアの良好関係を構築するための「子どもメディア学」の研究と実践を行なっている。

内田伸子

Uchida Nobuko



学術博士。第20期・第21期日本学術会議会員。お茶の水女子大学理事・副学長。専門分野は発達心理学・認知心理学。

1946年群馬県生まれ。1968年お茶の水女子大学教育学部卒業、1970年同大学院人文科学研究科修士課程修了。1998年同大学院人間文化研究科教授。日本発達心理学会理事、日本教育心理学会常任理事。

榊原洋一

Sakahara Yoichi



医学博士。お茶の水女子大学教授。日本子ども学会副代表。専門は小児神経学、発達神経学、特に注意欠陥多動性障害、アスペルガー症候群などの

発達障害の臨床と脳科学。1951年東京生まれ。1976年東京大学医学部卒業。東京大学小児科講師を経て、現職。

首藤美香子

Suto Mikako



人文科学博士。白梅学園大学子ども学部子ども学専攻教授。専門は子ども観の社会史・児童文化論・比較幼児教育学。特に、日本の子ども観の転換期の構造を「出産・育児」に関する言説と実践の分析を通じて研究してきた。お茶の水女子大学大学院人間文化研究科人間発達学専攻修了。

2001～2004年中国社会科学院近代史研究所・客員研究員。

多田千尋

Tada Chihiro



東京おもちゃ美術館館長。芸術教育研究所所長。早稲田大学文化構想学部講師。1961年東京都生まれ。明治大学法学部卒業後、ロシア科学アカデミー就学前教育研究所、国立玩具博物館の研究生として幼児教育・児童文化・おもちゃなどを学ぶ。近年は、子どもの福祉文化論及び世代間交流の実践・研究、高齢者福祉におけるQOLの向上とアクトイビティケアの連係を目指す。

山本登志哉

Yamamoto Toshiya



教育学博士。早稲田大学教授。子どもとお金研究会代表。その業績が認められ、中国の朱智賢心理学賞受賞。日本質的心理学会理事・編集委員。法と心理学会常任理事・編集委員長。1959年青森県生まれ。呉服屋の丁稚を経て、京都大学文学部・同大学院で心理学専攻。奈良女子大学在職時に文部省長期在外研究員として北京師範大学に滞在。

戴淑鳳

Dai Shufeng



発達・教育心理学修士。北京大学第一臨床医学院小児科教授。中国優生科学協会、優生優育協会理事、中国未来研究会教育分会主任委員など、児童研究に関する団体の数多くの要職を務める。北京東方聖童児童発達研究中心ターの創始者。北京大學病院が設立した学際的・国際的なネットワークをもつ周産期―新生児専攻のバイオニアとしても知られる。

傅根躍

Fu Genyue



浙江師範大学教育学院心理学部教授、発達と教育心理学修士課程指導教官。1996年アメリカ・モンタナ大学、1999年カナダ・クイーンズ大学にて、客員研究員として研究を行い、2002年浙江省の「151」人材に選ばれる。専門分野は、教育と発達心理学・心理測定学。

黄紹文

Huang Shaowen



教育学修士。中国長沙師範学校副教授。長期にわたって教師の教育に携わる。主な論文・著書に『学前教育の生態学的思考』、『中国伝統的な児童遊戯観深析』、『中国学前教育研究百科全書（教育理論編）』など。2005年、第一回中国宋慶齡幼児教育賞を受賞。

秦金亮

Qin Jintiang



心理学博士。浙江師範大学杭州幼児師範学院院長。中国教師教育学会幼稚園教師委員会理事長。中国心理学会教育心理学専攻委員会委員。浙江省就学前教育学会理事長。近年、子どもの発達研究、認知発達神経科学などの研究に携わり、子どもの自伝的記憶における文化と神経の構築、子どもの発達における文化的安全性などの領域で独自の道を切り拓いた。

巻頭言…………… 000
 講演者プロフィール…………… 002

序章 ● ご協力いただいた先生方のコメント…………… 005

第1章 ● 東アジア子ども学交流プログラムの発足（中国・長沙にて）…………… 011

① 子どもの育ちに大切なもの、「生きる喜びいっばい」——小林登…………… 012
 ② 子どもの「遊び力」が危ない——多田千尋…………… 015
 ③ 子育て・子育てエンパワメント——安梅勅江…………… 018
 ④ 子どもの社会性の発達とその障害——榊原洋一…………… 023

第2章 ● 子どもの成長・発達と生活環境（日本・東京にて）…………… 027

① 中国人から見た「小皇帝の涙」——朱家雄…………… 028
 ② 発達認知神経科学と早期教育——秦金亮…………… 032
 ③ 幼稚園教諭の養成に関して得た体験と理解——黄紹文…………… 034
 ④ シンポジウム1「日本から見た「中国の子どものいま」…………… 036
 ⑤ 日中比較の中で見えてくる「文化としての発達」——山本登志哉…………… 039
 ⑥ 日中の子ども観・発達観・教育観へのアプローチ——首藤美香子…………… 043
 ⑦ 幼児教育における日中関係史・比較史のスケッチ——一見真理子…………… 045
 ⑧ シンポジウム2「日中比較——子ども・発達・文化」…………… 049

第3章 ● 第3回 チャイルドケアリング・デザイン（中国・杭州にて）…………… 051

① Child-care Design (CCD)——小林登…………… 052
 ② 子どもが見る世界——朱家雄…………… 056
 ③ 幼児の好みと幼稚園の環境づくりをめぐる——秦金亮…………… 058
 ④ 子どものウソは「嘘」？——内田伸子…………… 062
 ⑤ 発達障害と保育——榊原洋一…………… 066
 ⑥ 幼児の社会的グルーミング——傅根躍…………… 071
 ⑦ 子どもの感覚・知覚発達障害と家庭教育環境のデザイン——戴淑鳳…………… 074

East Asia Child Science
 Exchange Program

[発行日] 2009年3月31日

[発行] チャイルド・リサーチ・ネット (CRN)
 〒101-8685 東京都千代田区神田神保町1-105 神保町三井ビル
 (株)ベネッセコーポレーション内

[編集人] 後藤憲子

[編集スタッフ] 木下編集事務所、CRNスタッフ (劉 愛萍、松本留奈、岩崎菜穂子、桜井玲子、張 志剛、武文)

[デザイン] 森一典デザイン事務所、富田淳子